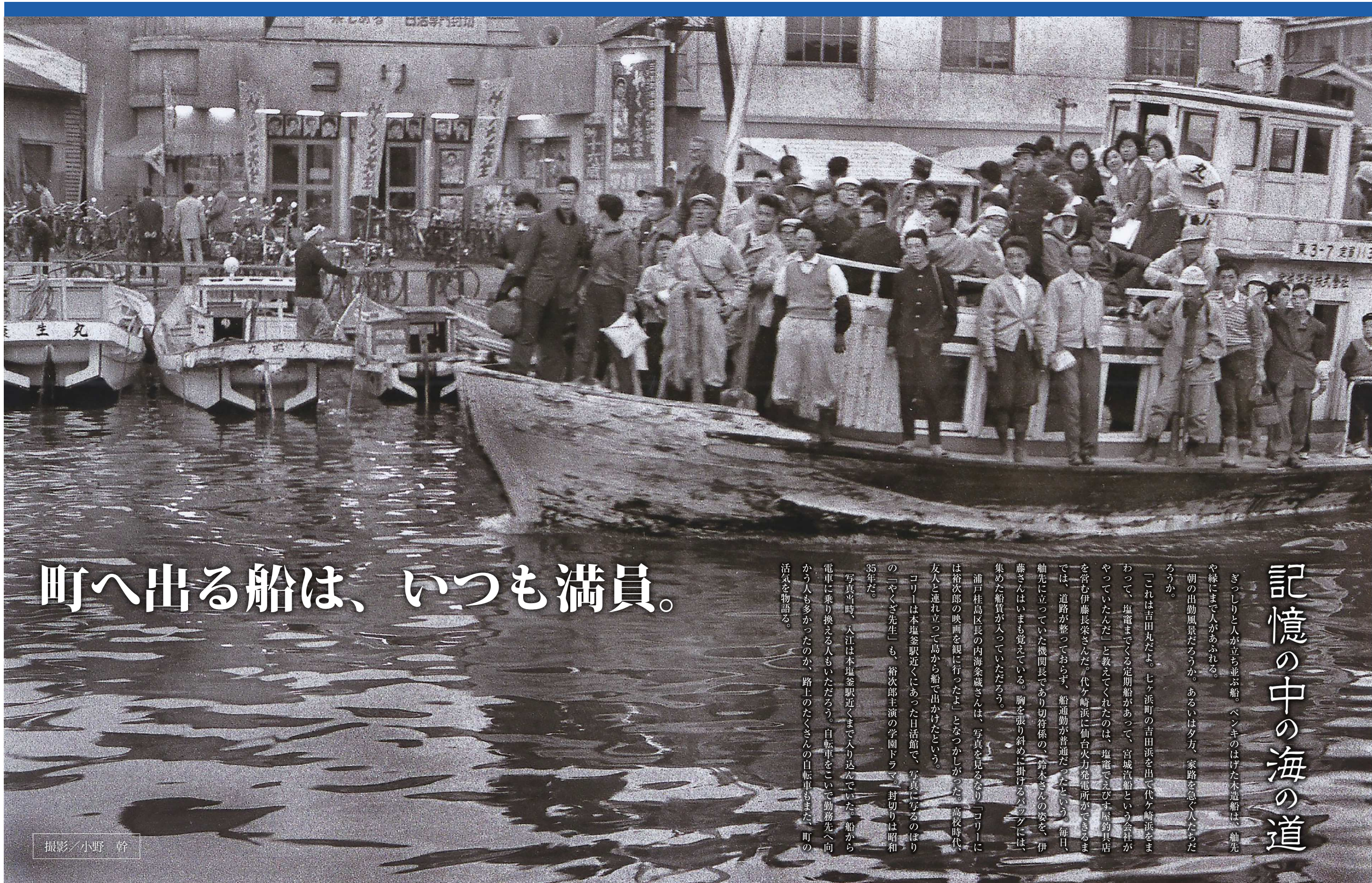


小野幹プロフィール

1932年岩手県藤沢町生まれ。1966年、仙台に小野幹スタジオを設立。1955年以来、東北電力の広報誌『家庭と電気』の写真担当として、新潟を含む東北7県の農村漁村をくまなく歩き人々の暮らしをカメラに収め続けた。著書に『わらしこの昭和—昭和30年代、みちのこの子どもたち』『東北のアルバム』(河出書房新社)、『写真帖追憶の仙台』(無明舎出版)など多数。



町へ出る船は、いつも満員。

記憶の中の海の道

ぎっしりと人が立ち並ぶ船。ベンキのはげた木造船は、船先や縁にまで人があふれる。朝の出動風景だろうか。あるいは夕方、家路を急ぐ人たちだろうか。

「これは吉田丸だよ。七ヶ浜町の吉田浜を出て代ヶ崎浜をまわって、塩竈までくる定期船があって、宮城汽船という会社がやっていたんだ」と教えてくれたのは、塩竈でえびす屋釣具店を営む伊藤長栄さんだ。代ヶ崎浜に仙台火力発電所がでるまでは、道路が整っておらず、船通勤が普通だったという。毎日、船先に立っていた機関長であり切符係の、鈴木さんの姿を、伊藤さんはいまも覚えている。胸を張り斜めに掛けるバッグには、集めた船賃が入っていただろう。

浦戸桂島区長の内海栄蔵さんは、写真を見るなり「コリーには裕次郎の映画を観に行つたよ」となつかしかった。高校時代、友人と連れ立って島から船で出かけたという。

コリーは本塩釜駅近くにあった日活館で、写真に写るのは昭和35年だ。

写真当時、入江は本塩釜駅近くまで入り込んでいた。船から電車に乗り換える人もいただろう。自転車をこいで勤務先へ向かう人も多かったのか、路上のたくさんの自転車もまた、町の活気を物語る。

撮影/小野 幹

島民の希望を乗せて 塩竈湾と浦戸諸島を結ぶ

浦戸自主航路運営協議会理事長
内海春雄さん

島民がみずから運行する航路

指定の携帯にかけると、「はい、水上タクシーです」と男性が出た。「塩竈から桂島に行きたい」と告げ岸壁で待つと、定刻の午前11時半に「SAWAYAKA号」が現れた。「浦戸自主航路運営協議会」が、この9月から就航させた定期便だ。この日の操船は内海三男さん。約20名の島民が登録し、みずから舵をとる。「漁業に携わる家の子なら、16歳で船舶免許取るからね。ほとんど漁師だけど、いまの季節はカキで忙しいから自営業の私が入りました」と三男さん。定員12名の船は、すべるように海苔養殖の



内海春雄さん（左）と國吉雅典さん。「息子のようなだね」と國吉さんを評する春雄さん。國吉さんは、いよいよ小型船舶の免許を取ろうと考えている。

朝、船着場まで 新聞を取りにいく

浦戸桂島区長 内海糸蔵さん



この島は人がいい

代々、桂島で暮らしてきたんです。桂島のいいところ？住んでる人間がいいんじゃないか。それと、空気もちろんだけど、景色がいいんだね。桂島神社の西にある二度森公園展望台からは、天気がいいと蔵王が見えるんですよ。いちばんは、5月、桜の花が咲くころ。山桜が咲いて、桜だつていろいろあるし、ここは松尾芭蕉が訪ねたところだからね。訪ねてきた人に、島めぐりのガイドもしてらんです。私は長く勤めにでてたんだけど、島から出れば開いだし、釣でも帰ってくればここでゆったりして、釣

島の暮らしは災害に強い

あの日は、地震がすごかったね。だからとんでもない津波がくるんじゃないかと直感したんです。桂島の区長になって、わずか5日目のことだったんですよ。ここは船着場の近くに消防小屋があって、何かのときはみんなで集まることになってるんです。コミュニケーションはとれてるから、みんなで相談して、歩けないような年寄りも運んだ。桂島小への避難は3、40分で、絶対戻っちゃいけない、と話してね。だから、一人も犠牲者はいなかったんです。

島なので、みんな米は1年分を備蓄して

ちな生活でないかな？

朝はね、船着場に新聞取りに行くことから始まるの。配達はないから、7時15分に船が運んでくると、みんな取りに行くんだつちゃ。何軒かの分まとめて持つてく人もいるし、歩いたり車に乗ったりして。私は坂を下って歩いていって、毎朝何人かとおしゃべりするのが楽しみ。まあ、行ってるうちは元気な証拠だね。

海を走り、15分ほど

で桂島に着いた。市営汽船の所要時間のほぼ半分感覚だ。

「大震災のあと、夜に塩竈を出て島に戻る民間の船がなく

なったんです。市営汽船の最終は夜6時なんで、通勤や通学の人は乗り遅れたら泊まらざるを得ない。島の人口が減る中で、何とかしなくては考えたんですよ」と話すのは、協議会理事長の内海春雄さんだ。



船の舵をとる内海三男さん。

大震災では多くのボランティアが島に入ったが、その中で(公財)さわやか福祉財団が、島民の足の確保を考える春雄さんらに、船の新造と資金提供を申し出てくれ実現したのだという。見込み乗客数や燃料代をすり合わせる中で、この白い小型船舶の導入が決まった。操船は「島のためだ」と船にかけてはベテランの漁たちが買って出てくれた。「定着させていかないと、これから勝負だね」と話す春雄さん。真新しい白い船体は、島民の希望を乗せている。

若者の力を島の復興に活かして

春雄さんには、片腕となって動き、島のこれからのために思い描いてくれる若者がいる。國吉雅典さんだ。國吉さんは山形大学在学中に震災にあい、同大の福島真司教

るし、冷凍庫にも食料はある。ノリ養殖の人たちが使うのでガソリンの備蓄もある。避難所には発電機もある。いつも備えているので、震災には強かった。

でも家は流されたね。うちのような分家は高いところにあつたからぎりぎりまぬがれたけど、養殖の作業がしやすくて海に近しいところの自家はやられてしまった。これはどこでもそのようだね。震災前90戸近くだった家は、いまは61戸になりました。

住む人を増やしたい

震災後はいろんな人がきました。3年半がたつて、一生つきあえる人が残ってくれて。そういう人たちと、島をどうするか、いっしょに考えてきたんだね。交流人口や定住人口を増やそうといつても、どうやっ

授が募った支援チームの一員として島を訪れた。以来、島の復興を助け魅力を発信して力になろうと、卒業後、2013年2月に一般社団法人「HOTO」を設立して事業の立ち上げや推進をこなしてきた。「仙台から週に2、3度は島にきてるんです」と國吉さん。もちろん、さわやか財団との交渉でもサポートにあたつた。

「書類ひとつまとめるにもパソコンに強い若い人の力がないとね」と話す春雄さんは、島の魅力を磨いていくためには外からの視点が必要と考えている。「毎日食べ、毎日眺めていると、その魅力にはなかなか気づきにくいからね」

すでに、國吉さんらは、地元で食べられてきた味を、お母さんのおすそ分けシリーズとして商品化し、東京で販売して大好評を得た。「震災はつらいものだったけど、いままでになつた関係を生んだ。島のよさをもっともつと発掘していけそうだね」と春雄さん。

2人はSAWAYAKA号を軌道に乗せるため、船を使うイベントも思案中だ。

SAWAYAKA号の運行

塩竈港と浦戸諸島を結ぶ。船は毎日運行。午前11時半には出る船は、火、木、土に運行。乗船は出発の1時間半～45分前までに電話で予約を。

080-6011-3838

⑤ 11時半の便は、天候や養殖業の繁忙期により欠航となる場合があります。

て増やすのか。住むにしても、住む家があるでしょう。だから市と話をし、学校の校舎の中に住まいをつくってもらうことになつたんですよ。あとは、お金とれないことには人は住めない、生業がないとだめなんだね。だから、漁協との連携もしてね。まあ、俺たちの努力が実を結びつつあるね。いま、災害公営住宅が建設中。ここに入れば、みんなようやく落ち着くかな。被害にあつた田んぼとか住宅の跡地は2メートルかさ上げをして、新たな道路もできる。そこには桜を植えたいね。

最近ね、畑仕事始めたの。私の先生はね、浪江から仙台に移り住んでボランティアにしてくれた人なんです。わからなくなると電話して。この間、隣の奥さんから つぼみ菜をもらって植えたんです。春が楽しみです。



来春収穫するつぼみ菜を植えた畑。糸蔵さんは、いねいに庭の手入れもする。ちなみに、桂島は8割の住民が内海姓。